

(No. 20)

事例名	大船渡屋台村
地域	岩手県大船渡市
実施主体	大船渡屋台村（有限責任事業組合）
活動要約	東日本大震災の被災者が仮設飲食店を期間限定で経営
主な分野	「起業支援」・「コミュニティ再生」・「憩い」
主な関係者	大船渡屋台村 20 店舗
キーワード	復興屋台村／起業支援／東日本大震災

## ■活動のきっかけ・経緯

### ●東日本大震災

- ・岩手県大船渡市（震災前の人口 39,000 人）は、東日本大震災により、死者・行方不明者 324 人、倒壊家屋 3,269 棟に及ぶ被害を出している。
- ・大船渡港に面した飲食店街も、津波により全滅状態となった。
- ・2012 年 3 月 2 日現在で、4,349 人が仮設住宅、1,943 人がみなし仮設住宅に入居している。

### ●大船渡屋台村 有限責任事業組合（LLP）

- ・そんな中、「飲食店の明かりから町の復興を」を掲げ、大船渡市大船渡町に 2011 年 12 月 20 日に仮設飲食店街がオープンした。これは、中小企業基盤整備機構の「仮設施設整備事業」として、地元市町村からの要請に基づき整備されたものである<sup>2</sup>。



<大船渡屋台村の入り口>

<sup>2</sup> 宮城県気仙沼市に「復興屋台村 気仙沼横丁」があるが、こちらは中小機構の支援スキームは使っていない。

## ■事業内容

- ・屋台村は、大船渡市以外に、陸前高田市で被災した店主のほか、震災を機に新規に開店する5軒を含めた20軒で構成（おでん、お寿司、お好み焼き、中華など、昼も営業しているのは9軒）される。
- ・この地区は、震災前はスナックの多い飲食店街であったが、屋台村の規程でスナックの営業は許可されていない為、小料理屋として営業している店舗が多い。
- ・市内でホテルを経営する及川雄右・大船渡地区飲食店組合長を中心とした有志6人が出資して新たに有限責任事業組合（及川組合長）を設立し、20軒の店主と出店契約を結んだ（3年の契約）。
- ・ライオンズクラブからの寄付での厨房機器購入、3年間の年限付きの賃料無しなど、出店者に支援がある。



<大船渡屋台村の案内板>

### ●おふくろの味えんがわ

- ・津波で被災し、新規に出店した店のひとつに「おふくろの味えんがわ」がある。店主の高橋恵美さんは大船渡でエステサロンを営んでいたが、津波で被災。夜は居酒屋だが、昼の部は母親のコウさん（86歳）に店を手伝ってもらっている。
- ・以下は、「えんがわ」で高橋コウさんから聞いた、津波被災からお店に出るまでの物語である。

\*\*\*\*\*

### ●被災、疎開から「えんがわ」開店まで

- ・2011年3月11日の震災時に、赤碕町の自宅で被災した。
- ・海と近い土地に家があり、緊急避難放送を聞いて近所の人と裏山に避難。津波で家を流され、流されなかったお宅に一時的に避難後に、公営の避難所に移動。（別居の娘とは3日間連絡が取れなかった）
- ・のちにNHKの安否確認に登録したところ、名古屋に住んでいる息子が見て駆け付け、東京の仕事用の住まいに避難する事をその場で決意した。
- ・東京都品川で3カ月間住み、息子の仕事の関係で一緒に立川市に転居した。その間、町田での集いや、新宿などにも出かけ、息子の仕事関係で畑づくりの指導を行ったりと活動的に動いていた。
- ・東京にずっと住むのも良いかと感じ始めた頃に、大船渡で別に暮らしていた娘が復興屋台村で居酒屋

を出店する話を聞き、40～50年も住んで友だちもいる故郷に戻ろうと決心した。

- ・娘は復興に関わる人の集まれる場を創りたいと候補地を探す中で、復興屋台村の話を知り（屋台村に出店を考えていた知人のスナックママから）応募した。その際、昼の営業をメインに考えていたが、屋台村は夜に営業する事が必須条件であった。
- ・息子から、出店するお店で、得意の料理を活かして楽しみながら、昼間に高齢者が集まる場を創ってほしいという話があった。
- ・東京に避難していた時に息子が連れて行って欲しかった大皿家庭料理の店が思い浮かび、そのイメージから盛り上がり開店を決意。（飲食業は始めてだが、特に悩まなかった）
- ・現在は、近くの仮設住宅から通い、昼間の時間帯のランチ営業の他、夜の居酒屋営業に向けてのおばんざいの仕込みを担当している。
- ・共に働くのは気心の知れた人がいいので、昼の時間帯と仕込みは、同郷の知人に手伝ってもらっている。
- ・客は、地元の知り合いと復興支援の方々が訪ねてくれる。
- ・復興屋台村ということで、家賃は不要。ただし光熱費は負担。



<お客さんとの語らい>



<ひつまみ汁定食>

### ●現在の心境

- ・昔は、家業が建設業だったので経理・接客などを手伝っていた。
- ・被災するまでは一人暮らしで、畑仕事以外には特に活動していなかった。
- ・住んでいた地域に住宅を再建することは不可能な状況で、娘と住んでいる仮設住宅（60世帯）は3年が年限であるが、知人もいる住宅から出て行きたくないと考えている。
- ・「何とかなる」「流れにのって行く」、常にそう考えて生きている。
- ・息子と一緒にいる時間が増えたり、「えんがわ」を手伝ったりと、これまで悲しい事が沢山あったけれど、今は、これも津波のおかげと言える境地になった。

### ■展望と課題

- ・港湾地区にある大船渡屋台村の周囲は、いたるところに津波被害の傷跡が残っている。向こう3年の

間に、大船渡の町全体がどのような形で復興するかは未知数のところがある。

- ・仮設住宅の入居期限（3年）もあり、復旧・仮復興期から本格復興・再生にむけての道筋提示が求められる。
- ・そんな中、86歳の高橋コウさんの前向きで明るい笑顔は、被災地の未来に希望をもたらしてくれる。



連絡先	大船渡屋台村 有限責任事業組合（組合長 及川雄右） 住所；岩手県大船渡市大船渡町字野々田 19-1 <a href="http://www.5502710.com/">http://www.5502710.com/</a>
-----	---

(No. 21)

事例名	カフェ・デ・モンク
地域	東北地方の津波被災避難場所など
実施主体	心の相談室
活動要約	被災地で巡回傾聴カフェを開催し、宗教者として被災者の悲しみを聴取
主な分野	「被災者支援」・「介護・ケア」
主な関係者	主宰者：通大寺住職 金田諦應 他、宗派を超えた宗教者 参加者：被災者（津波被災各地の高齢者・子ども・大人たち）
キーワード	東日本大震災／心のケア／傾聴／カフェ／心の相談室

## ■活動のきっかけ・経緯

### ●「超宗派の研究会」

- ・震災前から、宗派を超えた若手宗教者（仏教、キリスト教、神道など）や在宅ホスピス関係者などからなる「タナトロジー（死生学）研究会」において、緩和医療や自殺問題を議論していた。
- ・震災後の5月7日に、宗教者は何をできるかといったシンポジウムを仙台でやったが、キリスト教の川上直哉牧師がシンポジウムだけやっても仕方ないといいだした。

### ● Café de Monk（巡回型被災地傾聴カフェ）

- ・通大寺（宮城県栗原市築館の曹洞宗寺院）の金田諦應住職は、5月15日、独自の判断で被災地を巡回する活動として、超宗派のCafé de Monk（お坊さんの喫茶店、カフェ・デ・モンク）を立ち上げた。Monkには「僧侶」以外に「文句」、「悶苦」といった複数の意味が込められている。カフェは、被災者からの傾聴活動を成功させるためのツールであった。



<カフェ・デ・モンクの巡回傾聴活動>

- ・金田住職は自分の軽トラックで南三陸町の津波被災地に持参したケーキや飲み物類 200 人分は、すぐになくなった。うどんの炊き出しもやったが、国境なき医師団が帰還するというので地元の責任者が泣いていた。自分たち宗教者の使命は、うどん炊き出しではなく、生き残った被災者たちの「心のケア」（とりわけ悲嘆ケア）にとりくむべきだと痛感した。

## ■活動内容

- ・宗派を超えた 10 数人の宗教者が、がれきの中で、お経と讃美歌と一緒に歌うかたわらでは、遺体捜索が続いているという状況であった。



### ＜宗派を超え、被災地で鎮魂の祈りをささげる＞

- ・カフェ・デ・モンクと呼応する形で、2011 年 6 月 6 日には、前述のタナトロジー研究会のメンバー（宗派を超えた宗教者、医療やケアの専門家等）をベースに「心の相談室」が開設された。室長は名取市で在宅ホスピスを開業している岡部健医師である。
- ・奈良からは、浄土真宗の「歌う。尼さん」のやなせななさんも移動コンサートに参加した。唱歌「故郷」（うさぎ追いし）の合唱に、どこの避難場所でも皆が涙した。
- ・10 月 1 日、石巻の開成仮設住宅（1,500 戸）で、金田住職が、お経ではなく「上を向いて歩こう」をボサノバ風に演奏したところ<sup>3</sup>、聴衆はびっくりしたという。
- ・11 月 23 日、石巻市の北上町の「にっこりサンパーク」仮設住宅では、ベンチの上におばあちゃん、おじいちゃんがいる、用意した 80 個のケーキがなくなった。金田住職は、ひとりひとりの手に数珠をかけ、「ばあちゃん、今どうなのよ。家、流されたんだべ？何人か死んだんだべ」と土地の言

<sup>3</sup> 金田住職は、1505 年開基の通大寺 26 代目、祖父はバイオリンや女学校の校長をやったりする社会派であった。金田住職も若いころから音楽好きで、修行からもどった 30 代にバンドを再開したという世代。Café de Monk のオープニング時には、ジャズピアニスト、セロニアス・モンクの「ダイナ」の CD をかけるという。

葉で語りかけることが重要だったと回想する。

- ・「和尚さんな、まじないしてやっから、手だせ」といって、「にっこりパークのほっこりばあちゃん、丈夫で長生き、死ぬ時ぽっくり …、さ、これで大丈夫だ」と即興もやった。
- ・12月20日、仮設住宅地区の中にある結婚式場で、宗派を超えたクリスマスパーティもやった。クリスマスはキリスト教の行事といわれているが、季節が「暗闇から光に変わる時期」＝冬至の行事であると理由づけした。
- ・地元FM3局で、「心の相談室」主催のCafé de Monk をオンエア開始。これまでに、芥川賞作家で復興構想会議委員の玄侑宗久師や日野原重明先生も出演した。ワンクール 330 万円の放送料は義捐金でまかなわれた。

<Café de Monk FM放送出演者>

10月1日	金田 諦應	曹洞宗通大寺住職
10月8日	小野寺秀通	石巻市・洞源院住職
10月15日	岡部 健	医師、「心の相談室」代表
10月22日	篠原 鋭一	自殺防止ネットワーク
10月29日	魚谷 浩	オンザロード災害ボランティア
11月5日	川上 直哉	仙台市民教会主任担任牧師
11月12日	平間 至	塩釜出身カメラマン
11月19日	山浦 玄嗣	医師、ケセン語聖書翻訳者
11月26・29日	玄侑 宗久	作家、僧侶
12月10日	清水 康之	NPO法人ライフリンク代表
12月17日	鈴木 岩弓	東邦大学教授・宗教学
12月29日、1月6日	日野原重明	医師・聖路加国際病院理事長
2月11日	熊谷 達也	小説家

## ■ポイント・工夫している点

- ・カフェ・デ・モンクの中心メンバーとして、現在も被災地の巡回サロン活動を続けている金田住職は、今回の活動を振りかえって以下のように語る。

「このように大きな災害の前では、それこそ『神も仏もない』わけで、目の前の悲嘆にくれる残された方たちを前にして、宗派も教義も関係ないと痛感しました。大勢の亡くなった方たちの物語をどのようにつめてゆけるのか、それが宗教者に与えられたミッションです。一人の人が、家族や知り合いなど多くの人を失い、葬儀も満足にできていない。生き残った被災者の心の中は、さぞかしパニック状態でしょう。そんなとき、形は簡易であって、宗派は違っても、鎮魂の儀式の中で、残された人のパニック状態は徐々にさままわってゆくものだと思います。お数珠でも、お経でも、お祈りでもなんでもいいんです。」

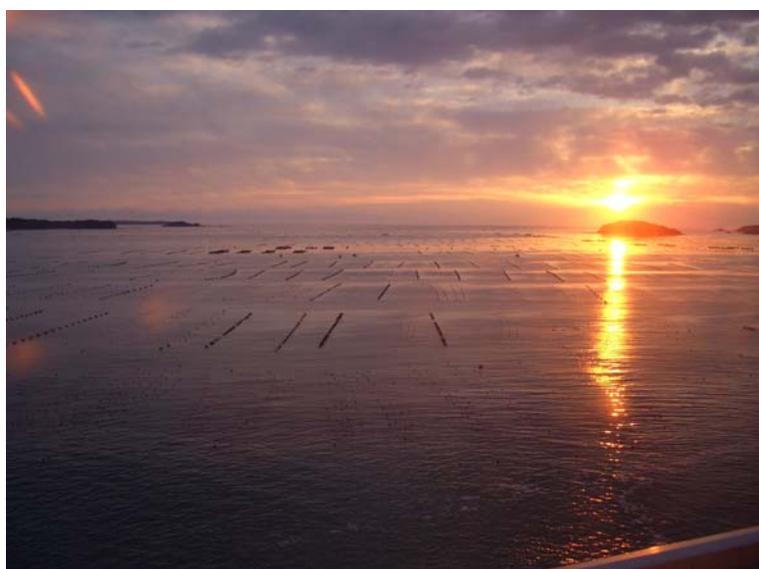
- ・震災後の被災者の「居場所」は、「仮設住宅」や「借り上げ住宅」といった居住空間、あるいは、仮設住宅エリアに開設された集会所や居酒屋・赤ちょうちんだけに限らない。多くの知り合いや親族を失

って残された被災者にとっては、「心のよりどころ」が必要である。しかも、「この世」に生きている自分の居場所だけでなく、亡くなった多くの人たちの居場所、すなわち「あの世」の問題でもある。

- ・「心の相談室」室長で、在宅ホスピスケアを実施している岡部健医師は、これまで死というものが日常化されてきた中で、震災で多くの痛ましい死を目の前にしたときこそ、残された人々に対して、宗教者の出番があると語る。「お経をあげる、讃美歌を歌うといった宗教的な行為よりも、まずは人々にただ寄り添うこと、そしてひたすら傾聴から始めることです。とはいえ、傾聴する側には相手からの嘆きや悲しみの思いが積み重なり、傾聴者は次第に疲れてきます。そんな時、強いのは宗教者です、何しろ自分が受けた嘆きや悲しみを、最後は、神や仏に丸ごとあずければいいのですから。<sup>2</sup>」
- ・カフェ・デ・モンの活動は、仏教、キリスト教、神道など超宗派で行われたことと、どちらかという若い世代の宗教者が、ケーキを持参し、唱歌「故郷（ふるさと）」やポップス調の歌も歌うという、「宗教臭くない」親しみやすさも大いなる力を発揮したといえよう。

## ■課題と今後の展開

- ・東日本大震災から1年が経過し、震災の記憶は次第に風化しつつある。一方、被災地では不安定な毎日の生活と故郷や家族・知人を失った喪失感がいまだに色濃く漂っている。そんな時に、高齢者を含む被災者の「心の居場所」や「魂の安らぎ」を支えるのは、実践的な宗教者<sup>3</sup>の出番かもしれない。
- ・金田住職の言葉。「大みそかまで陽の光は暗かったが、新春の石巻の海の光は全然違っていた。とても明るく感じました」



連絡先	曹洞宗通大寺（宮城県栗原市築館）住職 金田諦應 電話：0228-22-2656 「心の相談室」（室長：岡部健） 電話番号：0120-828-645 <a href="http://www.sal.tohoku.ac.jp/kokoro/diary.cgi">http://www.sal.tohoku.ac.jp/kokoro/diary.cgi</a> （心の相談室）
-----	---

<sup>2</sup> 短期間に200名を越える檀家の葬儀をとり行い、心労で自殺してしまった宗教者もいることも忘れてはならない。

<sup>3</sup> 岡部氏は、「臨床宗教師」の必要性を指摘している。